



明治四十五年二月二十三日印刷
 明治四十五年二月二十五日發行
 編纂發行人 安井正夫
 長野縣西筑摩郡福嶋町四〇四番地
 印刷者 兎澤忠雄
 長野縣松本市本町八百八拾四番地
 全縣全交文社
 發行所 蘆澤書店
 長野縣西筑摩郡福嶋町二八九番地

○本誌目次

○論說 森林ノ利益増進策
 日陰樹トシテノウォーダ
 一、オーケノ木
 一樹一木 千年ニ因メル
 樹木
 ○拔萃 竹類開花ノ原因
 據織・漆織及支那木織ニ
 關スル報告
 ○文苑 偶感 小品二題 和歌
 ○雜報 二三件

生徒募集

一、來ル四月本校第一學年ニ
 入學スヘキ生徒約五十名ヲ
 募集ス
 明治四十五年二月
 長野縣立甲種木曾山林學校

入學手續

本校ニ入學セントスル者ハ、入學願書ニ履歷書及体格
 検査書ヲ添ヘ來ル三月廿五日迄ニ差出スヘシ 其様式
 左ノ如シ
 一、入學願書(用紙美濃紙)
 御校ヘ入學志願ニ付御許可被成下度履歷書及身体檢
 査書相添此段願上候也
 何府縣何郡市町村何番地居住
 何府縣族稱誰子弟
 何府縣何郡市町村何番地
 年月日 全上 入學志望者 何 某印
 右父母後見人 何 某印
 長野縣立、木曾山林學校長江如銀之允殿
 履歷書
 本籍 何府縣何郡市町村番地族籍戸主又ハ誰子弟
 寄留地 何府縣何郡市町村番地 何 某印
 生年月日
 一何年何月ヨリ何學校ニ於テ何科何學年ノ教科ヲ修

業若クハ卒業(證書ノ寫シヲ添フヘシ)

一何年何月ヨリ何年何月迄何處何某ニ就キ何學ヲ修
 業
 一何年何月何處ニ於テ何事ニ付賞若クハ罰
 右ノ通相違無之候也
 年月日 身體検査書
 本籍 何府縣族籍
 寄留地 何府縣族籍
 一、体格 一、身長 一、体重
 一、陶圖(常時) 一、視力 一、痘
 一、陶圖(空虛) 一、視力 一、痘
 年月日 何 某印
 一、入學者資格及試験
 第一學年ニ入學シ得ル資格左ノ通り
 一、年齢滿十四年以上ノ男子ニシテ高等小學校卒業
 若クハ中等第二學年以上修業又ハ之ト同等以上ノ
 學力ヲ有スル者
 二、身體健全ニシテ規定ノ學科ヲ修ムルニ耐ユル者
 三、品行方正ニシテ林業ニ從事セントスル志望確實
 ナルモノ
 四、在學中學實ヲ辨シ得ル者
 右第一項末段同等以上ノ學力ヲ有スル者ヲ除クノ外
 無試験入學ヲ許可ス但シ入學志願者ガ證書人員ニ高
 過スル時ハ入學者全体ニ就テ試験ヲ行フ其程度ハ超
 等小學校卒業ノ程度ニシテ國算算術地理日本歴史理
 科ニ就テ試ム尙願書差出期限三月廿日ニ尙在學中ニ
 シテ三月末迄ニ卒業若クハ修業ノ見込アル者ハ其旨
 チ記載セル當該學校長ノ證明書ヲ願書ニ添付シテ差
 出スヘシ
 ○入學試験場
 攝拔試験ハ木縣管内各郡市役所ニ於テ又他府縣及本
 校所在地在任ノモノハ本校ニ於テ執行ス前者ノ場合

論說

本邦森林の現林業の利益増進策

從來濫伐濫採を重ね皮も肉も悉く剥き去ら
 るゝ迄虐待せられつゝあつた森林も文明の
 餘澤を豪り近年に至り漸く世人より其効用
 の廣大なることを認められ爾來森林整理の
 必要は盛んに稱導せられ林業の經營は年々
 盛運に向ひ今や何れの地方に至るも造林の
 必要と利益の多大なることを認め盛んに造
 林せらる様になつたは國家のため將た我林
 業のため誠に慶賀すべき事である。然るに
 竊て其造林の實況を視るに往々造林の方法
 を誤り或は植付後の保護手入れを怠りたる

北林正夫

がために成績の甚だ宜しからざるものを見受ける殊に林業經營上最も大切な保續的の施業計劃案を定め將來に對する經濟的關係を明かに査定し居る眞の經濟的的林業經營せるものに至りては殆んど之を見ることが出来ぬと云ふも差支へなき有様であるが甚だ遺憾なる次第である、左れば我國林業の現下の狀況より考ふれば將來尙造林奨励の必要なることは勿論であるが寧ろ經濟的的林業の方法即ち如何に經營すれば林業の利益を充分に取得し得べきやに就て講究することゝが刻下の急務であらうと考へる、之れ本題を掲げて卑見を述べんとする所以である

さて利益の多少と云ふことは収利率即ち資本額に對する純益額の割合の大小を意味するものであつて若し資本額を増加するとき其増加した割合以上に純益額が増加しなければ經濟的即ち利益が増進したと云ふこと出来ぬ而して林業の利益増進策に於ても此の經濟上の元則に據るべきものであつて其利益を増進せしむべき根元とも云ふべきものは次の三項である

一、生産増進
林地の生産力を最も經濟的に利用し單位面積に對する収額を成べく増加せしむること

二、價格増進
木材の品質を善良ならしめ且つ伐木造林運搬等の方法を適切ならしめ以て山地に於ける木材の單價を成べく増大ならしむること

三、生産費節約
林業經營上必要なる經費は勿論充分に支出すべきも比較的必要少き經費或は節約し得べき經費は成べく節約をなすこと

即ち一、二は收入を増し純益額の増進を計り三は生産資本を成べく少なからしめ以て収利率を大ならしむるのである、然るに此各項は其範圍甚だ廣く之れを詳細に説明するには林學の全体に涉りて述ぶるを要することとなるから此の限りある紙上に於て述べ盡すことは到底不可能であるから我國林業の現況に對し殊に注意を要する次の八項に就て概略を述べよう

一、樹種の撰定
二、種苗の撰定
三、森林の疎密度
四、造林の手法
五、輪伐期の撰定
六、運材法の改良
七、木材賣却法改良
八、造林費の節約

樹種の撰定は林業經營の所謂第一歩とも云ふべきもので其撰定の適當なる否は森林施業上最も重大なる關係を及ぼすものであるから深く注意を要する所である而して我國には有用なる林木の種類が甚だ多いのであるから造林すべき林地の氣候土地の性質に適應し且つ其木材は社會の需用多し利益の最も多いもの撰定せなければならぬ然るに我國に於て從來造林せらるるものは杉、扁柏、檜、樟等を主とし其他二三の樹種に限られ或地方の如きは土地氣候の關係をも無視して無暗に杉のみを植へ付けて居る所さへある、近頃は稍々土地氣候の關係に注意するものも少くない、之れは僕が或地方で實際に見聞した一例であるが或林業家が杉は濕地に適し扁柏は稍々乾燥の地を好むと云ふ話を聞て早速山の間の凹地で濕地の様になつて居る濕地に杉を植へ山の西南に向て能く乾燥する陽地に扁柏を植付けて大に

得意がつて居たことがある又此例とは反對に之地の關係を無視して單に經濟的關係のみから考へて落葉松を四國九州地方で造林を企て櫟の薪炭林を琉球小笠原島の低地に經營した者もある此業は極端な例であるが尠くも之れに類似し失敗の跡は各地に於ける見受くる所である要するに樹種の撰定は林業經營の根本であるから種々の關係を講究して其撰定を誤らぬことが大切である

二、種苗の撰定
種子と苗木は造林上最も大切な材料である若し其撰定を誤り不良の性質のものを用ひたときは其後の保護手入れを如何に可憐になすとも到底満足の結果を得らるべきものでなく農業上に於ても種子の撰定苗木の養成には最も注意せられ昔ながら苗木半作と云ふて苗が立派に出来たら最早半作は出来たものであると傳へられ居るが林業上に於ても種苗は確かに半作位の關係を持て居ると考へる、然るに我國の林業家は概ね價格の低廉なる事を希望して其品質の良否には深く注意するが少い自然種苗商も品質の良否よりも價格の低廉を以て競争する傾向がある現に僕の知人に種苗商を営んで居るものがあるが其者の話しに自分とても林業上種苗の大切なことは充分に承知し居るが善良なる種苗を供給するは種苗商の義務である考へて最初の内は非常に苦心して上等の種苗を撰定して販賣したが價格の點に於て他の同業者と競争することが出来ず大損失を受けたので近來は止むを得ず最も賣れ口の多い安物を販賣して居ると云ふことであつた、世間では種苗商の不徳を責むるものがあるが此友人の話

によると商人の不徳ならしめたのは却て林業者の不明なるが爲めである云はねばならぬ、僅少の經費を惜んで不良の種苗を求むるが如きは所謂一錢を惜みて百錢を失ふの類で誠に愚の極みと云はねばならぬ尙後は稍々不廉の代價を拂ふを要するも造林地と土地氣候の類似した所にある完全なる母樹から採集した種子を用ひ苗木も完全に生長したものを撰定せられんことを望む

三、森林の疎密度
一、林木の生長量に付て云へば孤立の状態にあるものが最大の生長量を有するものであるが林業經營上から云へば一林木の生長量よりも單位面積上に存する林木の總生長量の多きことが大切である而して林木の總生長量は其疎密度の即ち單位面積例へば一町歩に存する林木の多少に重大なる關係を有し其本数が多きに過ぐるも亦少きに失するも共に生長量を減じ丁度適當の本数を存し適當の密度を有する場合に於て最大の生長をなすものである然らば一町歩に對し幾本の林木を存立せしめば最大の生長を爲し最多の利益を擧げ得べきやと云ふに之は樹種地味年齢等によりて一様でないから實地に付いて講究した上でなければ一定の數を示すことは出来ぬ左れば造林をなす際には充分の樹種の性質土地の狀況等を調査した上適當の本数を植付け爾後林木の生長するに伴ふて適度の間伐を行ひ常に適度の閉を保たしめて林地の生産力を充分に利用し量多の收額を擧げる様にすることが大切である

四、造林地の手入
良苗を撰定し町歩に植付けを爲したると

其後の保護手入れを怠れば到底好結果は擧げられるものでない例令は種苗半作と云へ之れでは場合に依りては半作も擧げ得られないことがあるや嘗て或林業家が三十余万本の植へ込みをしたと云ふので態々視察に行つたことがある所其造林の大部分は雜木林で一向植込みをした様に見へないので之を質すと先生平氣に説明して云ふのに植へ込みはした筈だが其後手入れをしないから雜木の爲めに覆はれて見へないであらう然し半分通りは漸次雜木の間から生長する考へてあると成る程之れでは三十万本の植込みしたので造林をしたとは云へぬ筈である大に感心したことがあるが此の如きは何人が考へても愚の極であるがさて我國の造林地を見るに多くの地方に於て此の林業家の愚をやつて居るものが澤山にある様である勿論造林地の下刈には多額の經費を要するのであるから經濟上の關係によつて思ふ様に實行の出来ぬ事情もあらうが果して然りとすれば現今の造林は眞の造林ではない樹木、濫植であるとは云へるが林業上余り慶賀すべきことではないと思ふ尙後は多少造林面積を減ずるとも眞の造林をなす様にしたいと考へる

新植地の下刈に次に必要なるは林木の生長に伴ふて適度の疎伐を行ふことである之れは單に森林の手入と云ふ意味の外に直接林業の利益に多大の關係を有するものである現に吉野地方の杉林では疎伐収入は伐期収入の數倍に當ると云ふことである然し其實行の方法を誤れば却て利益を減少する恐れがあるから深く注意せねばならぬ

五、輪伐期の撰定

林木の生長には體積生長と形質生長との二様がある體積生長とは年々樹幹直徑及高さを加へ其材積を増すことで形質生長とは年齢の進むに伴ひ其樹幹の形態及材質を善良ならしめ利用上の價値を増し隨て木材の單價を増すことである而して此の兩種の生長量は年齢によりて等しくな今一般の場合に就て云へば體積生長は中年生頃迄は年齢の進むに伴ひ年々の生長量も多くなるが或る一定の年齢以上には達すると却て減少することとなる又多くの用材は高年に進むに従ひ漸次其形質を良好ならしむるものである故に同様の森林でも之を伐採する年齢によりて利益に大變な差異を生ずるのである尙言を換へて云へば林木は何時伐採しても多少の収利は擧げ得らるるも之れを伐採する年齢は林業の利益に重大なる關係を有するものであるから其利益の最も多き年齢を撰定することが大切である然るに此の利益の最も多き年齢は稍々或の收穫期の様に外面上に特徴が顯れないから之れを撰定するには復雜なる較利的計算をしなければならぬ左れば本邦の有名なる林業地に於ても未だ此の伐期を合理的に査定せられ最多の利益を擧げつゝある所は殆んどない多くは自家の經濟の都合又は適當なる買求者を得たる際に伐採するが如き有様である多年の勤勞と苦心の結果により成立したる森林を單に伐採の年度の不適當なるか爲めに當然得べき利益を失ふと云ふは實に遺憾千万のことと考へる(ツバク)

日陰樹としてのウオー

學術

ターオークの木

七宮 生譯

都市日蔭樹として完全無欠なるもの稀なり... 蓋し不適當なる土壤、大氣の状態、昆虫及菌類の害及街路の特徴に對する種々有害なる因子は日蔭樹種の數を甚だ少數に制限する若し此目的に適合する樹種を見出すならば其裨益する所實に少なからざるべし合衆南東部のウオーターオーク或はスボットテットオーク稱するは此種の樹木にして疑もなき南東部諸國に於ける最良の市街樹木なり夫れ故實際ジョージア及びフロリダ諸國の各都市に用ひられ現今北部コロリナの如き北方諸都市に於ては急に數多の劣等樹種に代用し盛んに植栽せらるる此樹木少壯時代は甚だよく移植に適し生長迅速枝葉は空氣の流通を阻害する程鬱せしめて美觀あり且つ其性濕地を愛するも日陰に適する如何なる樹よりも早魘に抵抗し強壯なり手入を要すること少なく昆虫菌類の被害少なきを以て普通市街及公園樹種は大部分是れなりウオーターオークの木は南東部に於て總ての樹類中最も普通なるものにしてテラツエーア洲の如き北部にも生育し内海地方より西方テキサス洲溪谷に至るまで播布す此樹木は一般に沼澤或は谷川沿岸及び豐饒なる河底地に生ずる事實よりウオーターオーク(水柳)の名あり又此の古木は往々中心空洞にして袋鼠の隠れ場となるを以てアラバマ及びテキサス地方にては袋鼠の木と稱せらる

蓋し是等樹種の最も貴重なる性質を表はせるなるべし種類名ニグラは黒いと云ふ羅典語にして濃き暗綠色の葉と小さき暗褐色の櫛斗を有する爲めに興へられたる名なりウオーターオークは普通樹高五十呎乃至七十呎直徑二呎乃至七呎に達す枝葉は通常樹幹より次第に擴張し齊整なる圓頂を形成するを以て特に日蔭樹に適す故に合衆南東部の樹類中最も雅緻ある且つ最も有用なる所なり時として樹高百呎に達し枝葉整然實に美觀を呈するものあり又此木の最好適地なる湖水或は谷川沿岸附近の濕潤地に於て光線を採りて生長生育をなす時は尖閣状となり充分なる光線と生育場所とを有する廣潤なる處に於ては枝條水平に擴張し廣大なる樹冠を形成す是れに櫛に稀見の特性なり中央ジョージアの北部にては一年中光澤ある綠色を呈し翌春新葉が出てよから漸次落葉するを以て落葉樹を見ることがなし然れども極北産地にては漸次冬期間に落葉し終ると云ふ

一樹一木 其九 小松 吉次郎

此樹木の學名はクエルクス、ニグラ、リン(クエルクス、アキテカ、ワルト)にして屬名クエルクスは羅典語よりとりしものなれども元來はケルト語の火の意味なるクエアと木の意味なるクエスより導きしものなり

白樫などいふものまして深山木の中にもいと氣高くして三位二位のうへのきぬ染む云々と枕の草紙に見れば昔より其名と用途と知られ特に高貴の衣裳の染料に供したる木なれば廣く重用せしこと明かなり常緑の潤葉樹多き中にも特に貴はれしものと見ゆ其種類も多しして一二に止まらず彼の東京附近に生垣として外觀の美他樹の及ばざる白樫あり火力にとみて其名厨房の間に知らるる備長炭は姥芽樫の材より製す近畿地

方到庭木として其新芽を愛玩するは血櫛なる葉の最も厚き大なるシリフが櫛は多く人の氣附かざるものとす薩摩日向地方に多き櫛は櫛材として欠くべからず薪炭として日常用立つ茲に記すべくもあらす用材として器具類に用ゐらるる中にも車輪材として欠くべからざる重要樹種なり車輪は何時の御代よりありしか明かならねど支那にては我國にも雄略天皇の御代に車の使用ありし牛車に乘り一層廣く用ゐしこと明かなり明治八年には我國の車數二十三萬輛にして人口四十七人に對し一輛の割合なりしが三十九年には二百萬輛に増加し人口二十四人に一輛の割合と激増し近時更に二百四十萬輛に達せり單に車輪と云へば荷車より電車に至る總稱なれど此櫛材が最も多く使用せるは荷車、荷馬車、砲車、輻重車とす此等の車は車輪及車臺を構造するに他樹種の材に比して幾何の割合に達せるかを東京に見受くる荷車、荷馬車等につき表示せんとす櫛材は獨り近時此の如く車輪に欠くべからず用材となりしにあらす古き時代より車輪用材は櫛材を主とせしこと明かなり即小車のもる輪にかくるかたがしの

Table with 4 columns: 種類 (種類), 樹種 (樹種), 材積 (材積), 百分率 (百分率). Rows include 全櫛, 車輪, 車臺, 材積, 樹種.

Table with 4 columns: 計 (計), 全櫛 (全櫛), 野砲車輪 (野砲車輪), 三式計 (三式計). Rows include 二百貫積樺, 四輪荷車, 野砲車輪, 三式計, 三九式二輪重車.

即ち荷車荷馬車には櫛材は少くとも用材の一割三分より八割八分まで使用せり又軍隊に使用する輻重車にも荷用材の六割三分は櫛材なれば此後如何に多量の櫛材を必要とすべしか推知するに難からず

子年に因める樹木に就て

年恰も壬子に當りしを以て子年に因める樹木に付き二三つ書き綴る事とす

掌緑小喬木にして雌雄異株なり温暖兩帶に亘り生じ小笠原及び臺灣の高山にも在り云ふ海岸の砂地及其他瘠地に自生す右よりねすみさしを詠める歌に しぐるれと秋の色には、はなれんにみどりかかれらすたててるむろの木 行家 あすさ引いて邊に立てるむろの木のこと 家は 昔天明の頃御嶽の開山に綠深き覺明靈人の云ひ傳へし所なりと云へるを聞くに「...」の樹が山々に生へ榮ゆる内は天下は泰平なれどもねすみさしが峯より谷に生へ運るに至る時は最早其土地衰ふへし...」と蓋し該樹の蕃殖するに至れるは既に土地疲弊せしによるものなるを云ひたるものにして吾徒は百幾十歳の昔此の言を遺せし神明を嘆賞せざる能はず雖は杜松亡國論などの起らんに限らず吾人の最も注意を拂ふべき事なりとす 本樹の効用は土地の改良を其の主なるものとし材は水濕に耐ふるを以て水邊に使用し實よりは油又は薬を探ることを得ると云ふ而して庭園の垣根等として價值あり變種はよれねす、ひめむろ等あり亦びやくしん、はいびやくしんは其同屬なり 二、ねすみ其葉のみに似て材暗黒色なるよりくろべ又はくろびの名あり普通櫛、獵子等に書するも其出所明かならず 本縣に於ては七千尺内外まで生じ木曾五木中其數最も少なき者なり材は暗黒色にして上品なり其質輕軟木理通直にして天井及壁板となして雅致に富む木曾にては此樹の板にて壁を造る時は秘密の漏れざるものとて重用せりとか此樹種は往古より詩歌に遺されしもの少し 三、ねすみもち別にたまつばき、犬つばき

五、ねすみのき又ねむりの木、ねふた等も云ふ合款(本草綱目)と書す具原先生の大和本草に「...」知名ねふの木藻捕草にかふかの木とも云ふ、かふかの畧語なるべし夜は其葉合故にねふりの木と云ふ...中華には夜合葉と稱す...」とあり本縣到る處の山野に見らるる七月花系淡紅色の花を開く此の樹の葉は夕陽西山に没するに及んで萎みて

眠りたるが如く見ゆるを以て
 ひるは咲き夜はしひぬる合歡花
 われのみみめや、わけさへにみよ萬葉集
 紀伊女
 わむの花小僧はかりもしかられず 也有
 ねむの木の葉ひしもいとへ星の影 芭蕉
 など詠まれ
 和漢三才圖會に「其線葉至、夜則合也、
 此樹生三山谷人家植於庭除間、使人不
 怨蓋曰合歡獨忿……」とあり又慶すべきを
 失はば葉は煎して説瀧用とし材は質緻密に
 して車輪下駄の齒に用ひられ又砂地瘠地の
 植樹に適す石川縣石川郡下安原に於ては潮
 風の劇しき海岸に此樹の砂防林を造り好成
 績を挙げたりと云ふ
 壬子一月一日 長野縣廳宿直室にて認む

拔萃

竹類開花の原因に就て

(一)緒言
 竹類が開花によりて枯死することは古昔よ
 り知られたる所にして自然枯死又は稀に十年
 枯と稱し其結實して生じたる種子を特に竹
 米竹麥自在穂等と云へり元來自然枯の名は
 斯く竹類の開花によりて枯死するを呼ひた
 るものなれども一般には一種の病害菌の寄
 生によりて小枝簇生して垂下し遂には竹の
 枯死を招くことある所謂天狗糞病に向つて
 も亦同様に此の名を以て呼べるものなれど
 も夫れは特に蔓自然枯と稱して明かに之と
 區別すべきものなり此の蔓自然枯は本邦各
 地の苦竹淡竹等の竹林に最も多く蔓延せる
 所のものなれども其被害は左程大ならず然
 るに開花による自然枯病は至竹林の竹稈は

勿論同種類の竹林は本邦全土に亘り殆んど
 皆同時期に發病すること恰も劇烈なる傳染
 病の如くにして其害實に恐るべきものなり
 抑も苦竹淡竹の如き栽培竹が開花枯死する
 ことは吾人の多く経験せざる所にして唯今
 日七十歳以上の老人が嘗て幼時此事ありし
 こと吾人に語るにより或は其當時の記録に
 よりて是れを知るのみにして其以後近年に
 至るまで絶へて無かりしが近年再び淡竹林
 に發生し始明治三十六七年の頃より漸く世
 人の認むる程度となり其後遂年蔓延して明
 治四十年前後に於て其被害は最も猖獗を極
 めて本邦全土に亘り荷も淡竹及び其變種
 に屬する黒竹雲統竹等ある地方は殆んど全
 部之が被害を蒙らざるなき有様となれり斯
 の如く明治四十四年頃を翌々中心として前
 後數年の間に我國の淡竹林は此の恐るべき
 開花病の襲ふ所となれり
 然れば本病害の發生以來官民舉て是が防止
 を勉めたる中にも春日仲淵と云へる人は自
 然枯防に經驗ありと稱し明治三十七年中
 『自然枯急救法』及び『竹林培養備考』なる二
 冊子を著し尚竹林培養講習所を東京麹町區
 富士見町に設け會員傳習生を募集し主とし
 て自然枯病に對する豫防方法を傳授すと稱
 へ且同年中林學博士本多靜六氏を訪問した
 るを始めとし農商務大臣、京都府知事、山
 局長、山林局林業課長等に自然枯防の意
 見を述べたり
 次て明治四十二年には千葉縣は農商務省農
 事試驗所員と藏梅之丞氏等に本病の調査を
 依頼し埼玉縣は坪井伊助氏を招聘して同じ
 く本病の調査をなしたるが其他の各府縣就
 れも又多少本病に對する處置を取らざるな
 く竹林所有者亦皆之が豫防救濟策を講せざ
 るもの無かりしが不幸にて蒙た本病の原因

本病源に關する從來の諸説

竹の開花枯死に關して文獻中特に其原因に
 言及せるもの數種あり
 (一)戴凱之著竹譜(二)陳扶搖著秘傳花鏡
 卷四(三)時珍著本草綱目卷三七(四)佩文
 齋廣群芳譜卷八四(五)張宗法師古甫著等
 にして只僅に竹類一般が六十年毎に一度開
 花枯死することを云へるに過ぎず又佐藤信
 淵著草木六部料種法卷六には三年過ぎざる
 竹を伐れば必ず竹の勢を傷く又七八年以上
 其餘力も伐らずして置くときは花發き實結
 て其竹必ず枯者なり云々此の如く種々の説
 あれど畢竟竹林の伐採繁れば次第に細き竹
 稈と化し伐ることなく適度に施肥すれば次
 第に太き竹稈となること明かなり七八年以
 上其餘も伐らざれば花開き實結ひ枯死すと
 は明かなり凡竹の老ひたるものは其枝
 幹の先端黄色に變じ葉自然に脱落して遂に
 枯死するものなれども開花することは通常
 なきものなりされば從來の諸説は老釋の自
 然に枯死するものと開花の爲枯するもの
 とを混同せるものと謂ふべし
 片山直人著日本竹譜上卷に竹の開花を論じ
 て六十年或は三十年開花説を不可とし全く
 養分欠乏にありと決定せり然れども其説も
 亦必ず養分の欠乏による論據未だ薄弱
 にして一種の想像に過ぎざるなり
 春日仲淵氏は一般に竹林枯死は將に枯死病
 を發せんとする時に一方に自然枯死發生す
 る時は枯死の兆候を呈す一種の虫類が致
 す處ならん亦氏は枯死病と自然枯死を區別
 し虫類か之に乗じて寄生するものとせり
 芝田桂太氏は竹類に於て開花を見る事の稀
 なるは(一)竹類の生殖的成熟の晚きこと

(二)開花の後營養管の枯死することこれな
 り此の説今日まで多くの人々に依て述べら
 れたる諸説中最も穩健なるものと云ふべし
 堀正太郎氏は竹林の開花は竹の老若を問は
 ず全竹林は殆んど同時に開花するを以て竹
 の年齢に關係なし此年齢によらずと云ふ事
 は未だ明ならず即ち明治四十二年女竹の種
 子を採集して播種せし翌年に至り全部開
 花せりと、之亦疑ふべき處多し何ぞなれば
 わずかに一年生の體質幼弱にして當底開花
 を見るべきものに非ず
 亦氏は南又は西南に面して比較的日光に
 浴する事多き部分より開花し初むるを常と
 す即ち日光温度空氣及土壤乾燥養分の欠乏
 等は植物界を通じて一般に開花を促す要件
 なれば竹の開花に關する根本の原因は必ず
 他に有るべし
 (三)竹の開花に週期ある事
 竹は六十年に開花結實すと云ふ事は學術上
 眞じかたしと云へ雖世人は弘化嘉永の頃に
 苦竹淡竹が開花したる以後凡ろ六十年なる
 今日に再び淡竹の開花を見るに至たる事實
 に因りて竹の開花に年代又は年齢の關係を
 唱ふるものあり若し竹に週期的開花をなす
 ものあれば現今の淡竹は凡て其時期に到着
 して今日未だ開花せざるも早晚開花すべき
 素因を有するものなり故に當底此問題に關
 する實驗に使用しがたしされば記録中實際
 を目撃して年代明記せる確實なるものを上
 げて參考にせん
 一、中澤廣江氏談 今より六十年前美作の
 國一圓に苦竹の開花枯死すること流行し數
 年の内に國中の苦竹林は殆んど全部枯死し
 て數年間苦竹を見ず云々其後三十三歳の時
 (五十二年)大坂附近に苦竹及淡竹も大形
 枯たり
 二、植村政平氏談 弘化三年の頃苦竹林が

として吾人の満足すべき説明を與へたるな
 くて其豫防策として一定の方針なく只自
 然の趨勢に任すのみにして全國の淡竹林を
 擧げて慘狀今日の如くに至らしめたるのみ
 ならず此後若し又竹林の開花病を發する時
 期到らんも吾人の慘害を豫期しつゝ徒に拱
 手してなすなきの止むを得ざる折柄農商務
 省技師堀正太郎氏は自然枯の原因は近年來
 氣候の早魃なりしと竹林の養分欠乏の結果
 なりしと論じて本年二月農商務省農事試驗
 場報告第三十八號に記述し且二月廿三日東
 京植物學會に於て之が講演をせられたり
 本病の元因に關しては從來多くの人々によ
 りて諸説を述べられたれども未だ學者の所
 説として吾人の準據するに足るものなかり
 しか前述の如く堀氏が學説を發表せられた
 るは本邦の學者として本病因に關し解釋を
 與へたる最初の人なり然れども予は本病の
 發生以來竹類を以て開へたる京都府奈良縣
 等を始め埼玉、茨城、栃木、千葉、三重、長野
 岐阜、愛知、岡山等の各府縣等の各府縣下
 旅行して實地に視察し居たる本病の發生
 には氣候地味に關する事極めて少なくし
 て他に元因となるべきものあるべしと推察
 し從來本病の原因に關しては深く注意しつ
 りありしが本病害は只に本邦國に止まらず
 同種類の竹は歐洲に於ても又同時期に開花
 せる報告を得たることありたれば更に氣象
 上廣く地球上全面を支配するものあるべし
 と思ひ取調べたることありしに到底温度温
 氣、日光地味の如何を以て説明する能はざ
 ることを確め居たる折柄堀氏の發表せる學
 説は余が説と大に異なる處あるを以て遂に
 余が卑見を開陳する必要を認め本年五月二
 十七日東京植物學會に於て先之を發表した
 りば今亦茲に是を順序を追ふて詳記するこ
 ととせり

開花の後盡く枯れて世の中に苦竹無くなり
 たらば諸種の用途に差支たり云々
 三、香川縣の回答中に約五十五年前に安原
 村の苦竹林殆んど全部開花結實して一時萎
 縮せしことありしも其後自然に現今の狀態
 に復したり云々
 四、太田子德氏著勸農百首に弘化丙午の年
 結實して枯果つ云々
 以上の記録より考ふるに弘化嘉永の頃には
 若竹は東京、岐阜、京都、大坂、香川、岡山等
 の各地に開花枯死したること明かなり故に
 弘化三年を假りに其時代に於ける開花盛な
 る年となす事を得、淡竹は苦竹について開
 花せりと云へば嘉永元年を以て假りに淡竹
 の開花盛なる年と選ぶ近時本邦全土に淡竹
 の開花を見たる調べにより開花の最も盛
 なりし年を例記すれば
 兵庫縣 明治三十七八年
 京都府 明治三十六七年
 滋賀縣 明治三十六七年
 埼玉縣 明治三十七八年
 鳥取縣 明治三十七八年
 山口縣 明治三十七八年
 奈良縣 明治三十七八年
 岐阜縣 明治三十七八年
 茨城縣 明治三十七八年
 香川縣 明治三十七八年
 千代田縣 明治三十七八年
 佐賀縣 明治三十七八年
 故に淡竹の開花の盛なりしは明治三十八九
 年後にして右の調査は四十一年に於てなし
 たるものなるか故に四十一年後の年代は擧
 げざれども其後四十二年に於ても盛に開
 花の最も盛なりし年の一として撰ぶ事を得
 へし
 蠟(木蠟)漆蠟及支那木
 蠟に關する報告
 表題に記せる四種の蠟はうるし屬植物の果

實より得る固形脂肪なり... 此等の各地方は同時に亦蠟燭の産地なり...

樹は地味暗の如き肥沃なる平地... 蠟燭の果實は歪形又は楕圓形扁平体にして...

新實より得たる生蠟を新實蠟古實より得たるものを古實蠟と云ふ...

度に乾燥せる色素は之を木蠟と混むるも殆んど溶解することなし

其二、製蠟法

一、植實の分離及粉砕粉部屋

粉部屋にて行ふ行程は荒蠟(莖を附着せるもの)を床上に擴け竹棒の先端に回轉し得る重き木片を附着せる所謂ふりこにて之を打つ...

り二番絞を行ふには踏み砕ける粕を稍や粗大なる篩にて篩ひ核を篩上に止めて之を除き去り篩分に少量のハセ核油を混して粘性を與へ次に蒸して搾ること一番の時の如く...

も多少劣ると云ふ博多市太田氏工場にては板水壓器を用ゐたることあり九州地方に抽出法(石油を引く用)に...

文苑

偶感

十二月七日の晩であつた、折しも舊曆の十七夜圍々たる明月は物凄程牙え切つて...

節々沈痛激越の調に對しては誰か感極り情激し果ては沈思默想の奥底に訪はれぬものがある、昨夏御嶽登山の道中黒澤ありの草山で草刈乙女が朝露を浴び乍ら朗々と歌つて居るのを聞いた事がある、其時一種の感激に撃たれたがまた今夜の如く我情感を刺激した事は無い時は是なるが爲か風物の佳なるが爲か、夫とも今夜の歌調が殊更巧妙な爲であらうか、恐らくは是等のもの總てが相會し相抱合し相渾一して美妙の合奏となり更に我心の琴線に觸れて共鳴したのであらう、自分は此云ひ知らぬ美妙の音楽に酔うた、而して酔ひつゝある間に色々の感想に耽つて見た

へば夫は活動せる舞臺の大小から起る感で實は人物に大小はないと云ふ人があるかも知れぬ、けれども小成に安んじ眼を八絃に注ぐ事の出来ないのは矢張四周海と云ふ自然の影響感化も教育修養に依て如何様にも變化せしめる事が出来るから何れも山國に生れ島國に生れた事を悲には及ばない、否々其長所を益々發揮せしめ其短所は之を補つて行かねばならぬ、今は兎も角まれ此山高く水急なる木曾の天地に生れて一種悲愴の調を帯んで居る木曾節、之を聞く人は幾命多感の詩人ならずとも一片哀愁の情を惹起さぬものはない、況んや霜露已に降り山月氷を研えた冬の夜をやである

小品二題

山茶花 山の 人

窓を開いて藍のやうな空をちぎれ雲の北へ北へと飛ぶを眺めた、うして美しい故郷の夢が流れてくるやうな木曾川の白い川浪を見た、机の上に睡を投げたとき淡路焼の鉢に植えてある山茶花の花びらが一つ淋しく零れた深い緑の葉のなかから覗いていた美しい優しい花びらが

鐘の音 全

岸行寺の鐘がなる、百八の淋しい鐘の音、青く震へる鐘の響は悲しい悲しい臨終の嘆きを訴へるやうに淡く淡く漂ふ暗い霧から霧へつたはら木木の梢に残つた枯葉を濡して死んだやうな闇の天地に響く、餘韻餘韻のあとを追うて糸のやうな心の底を深く深

く遠く行く！冷やかな空気は絶えず顔へてゐた……すこい鐘の音が高調な悲哀の満ちた胸の中を暖かきはしまいか、除韻の波紋が遠く遠く消えゆく彼方のみ空に青い星が一つ瞬いてゐる

和歌

さきに我家に寄寓して苦學をなし木曾山林學校を卒業せる當時帝室林野管理局木曾支廳技師與原吉右衛門ぬしが其若學中の恩に酬ゆるとて我等夫婦に伊勢參宮をすめあまたの旅費をめぐまれば其ころさしに感じ俄かに思ひたち二人うちつれ一月十日旅行の途にのばりぬ其旅行中よめる數首の二三を左に

木曾 安 井 正 夫

伊勢神宮に詣て

かざりなくうれしきものは二人して宮詣するけふにありける

二見にて

二見かたふたたびみむとたもかな岩間にうつる天津日のかけ

妻が二見はじめ各處の景をめてて尙かさねて旅行したしなごいひいでければ

もろともいきながらへてたひころもかさねてみむとたもひぬるかな

旅行先より與原吉右衛門ぬしによみ送る

まことある人のめぐみを身にうけてあふぶ旅路のたもしろきかな

松上の鶴 松かえを千代のやどりとさためけんいつもかはらぬ鶴のすこもり

殖林數へ歌

長野縣技師安藤林學士撰

- 一ツトヤ、人々起きよ目をさませ御國の山のさまを見よ
二ツトヤ、文は讀むとも讀まぬとも國を思はば木を植へよ
三ツトヤ、緑の山も禿山も民の心得一つなり
四ツトヤ、良き土地氣候を持たながら植林せぬは馬鹿の極
五ツトヤ、如何てすつべき此まに大に勵め植林を
六ツトヤ、無窮の利益は山にあり富の源山にあり
七ツトヤ、永き月日をかこたすに國と子孫の爲め思ひ
八ツトヤ、炎く夏の日も冬空も朝とく起きて山に入り
九ツトヤ、此世の利慾をよりにして自然の教を守りつ
十ツトヤ、富と徳との兩道に世渡りするころ貴けれ

木材利用いろは盡し

全 氏 撰 定

印刷材にはツゲ、サクラ、イタフがよし
欄干にはケヤキ、ナラ、カシがよし
棟木はケヤキ、カラマツ、スギがよし
白杵類にはケヤキ、ナラ、カシ類がよし

稿材にはケヤキ、マツ、ヒノキ、カラマツがよし
荷車材には、カシ類ケヤキがよし
杭柱電柱にはスギ、ヒノキ、カラマツがよし
標榜材にはマツ、スギ、カラマツがよし
床柱材にはクワリシ、カキ、スギがよし
地形材にはカラマツ、クロマツ、ヒバ、クワリがよし
輻用材にはシラカシ、ケヤキ、ヒノキ、スギがよし
スキ材には、ヒノキ、スギ、マツがよし
疊壁も木材にて造るがよし
母屋にはスギ、ヒノキ、モミがよし
椀盆の木地にはトチ、ケヤキ、カツラがよし
紙を造るにはモミ、ツガ、ドロ、ヤマナラシがよし
揚子箸材にはクロモジ、ヤナギ、スギがよし
樽材にはサハラ、スギ、ナラがよし
煉瓦を焼くには鋸屑を混するがよし
染色劑はヒノキ、スルデ、キハダがよし
圖板にはヤマザクラ、ホト、ヒノキがよし
燃料にはクスギ、カシ、マツが最もよし
鞣皮劑にはカシ類ヒノキカシワの皮がよし
欄干にはケヤキ、ナラ、カシがよし
棟木はケヤキ、カラマツ、スギがよし
白杵類にはケヤキ、ナラ、カシ類がよし

友林蘇岐

明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可

の 井戸側にはヒノキ、マツ類アスナロがす
 よし、農具材にはサハラ、スギ、ヒバがよし
 桶材にはサハラ、スギ、ヒバがよし
 櫛材にはツゲ、イヌツゲがよし
 や、屋根板にはヒノキ、アスナロマツスギ
 がよし
 ま 燐寸の軸木にはドロ、ヤマナラシ、ヤ
 ナギ類がよし
 け 桁材にはモミ、ヒノキ、スギ、マツが
 よし
 ふ 船材にはケヤキ、ヒノキ、ツガチーク
 がよし
 こ 碁盤材にはカヤ、イテウ、ツガがよし
 え 鉛筆用材にはエンビツビヤクシンアラ
 、ギ、カツラがよし
 て 鐵道枕木にはクリ、マツ、カラマツ、
 プナがよし
 あ 洗料にはサヒカチ、ネム、ムクロジか
 よし
 さ 細工ものにはサクラ、ホ、ジンダイ
 スギ、ヒノキがよし
 き 器具裝飾材にはキリ、クス、ケヤキ、
 トナがよし
 ゆ 油煙を取るにはアカマツがよし
 め 目板にはクリ、ヒバ、マツがよし
 み 溝堰用材にはヒノキ、ヒバ、マツがよ
 し
 し 樟腦はクスから取るがよし
 ひ 火鉢煙草盆にはケヤキ、クハ、キリ、
 クリがよし
 も 門扉にはヒノキ、スギ、ケヤキがよし
 せ 製臘製油にはハゼ、クス、ヌレデ、カ
 ヤ、ツバキがよし

水道暗溝にはマツ、ヒバ、カラマツか
よし

雜報

學校近況

○始業式 暫く袂を分ち夫々家郷に歸省せし職員生徒一同は一月十九日午前十時講堂に相會しぬ校長は新春と共に新なる勇氣希望を以て修養に邁進すべきを希望し尙勉強法其他二三に就き懇篤なる訓辭あり十一時終了せり

謹賀新年

壬子正月 木曾山林學校々友會
 本會に宛て賀狀を寄せられたる諸氏左の如し謹て茲に御禮申上候

- 河野長六、黒河内祐紀、米山太郎吉、有川仙之助、藤江再吉、遠藤宗作、高柴眞次郎、原耕民、宮崎次郎、今井健治、金井澄水、野村光治、鶴岡政義、服部啓次郎、兒野榮、木村康明、下條初太郎、小岩井是非雄、竹内房太郎、松澤莊太郎、新田忠次郎、北川信美、島田勘四郎、柳澤熊治、北澤時三郎、大脇又衛、大森久治、芦澤庸三、川岸滋次郎、倉澤眞、和田宗吉、乙谷耕吉、小澤順、徳武國久、矢嶋駒次、梨原貞次、松澤萬吉、上原上奥原吉右衛門、松本清太、松井定道、本多清右衛門、杉本實、木下清、

藤原錫三郎、高橋博、宮澤嘉一、柏澤國治、仁科春、塚本三樹、松島九平、岡戸廣治、下畑徳十、遠山一郎、西尾長一、塩川金次、原田久保作、加藤正次、加藤清一、柳澤邦信、澤田貞次郎、瀬在實、長谷部兵治、村井正三郎、坂本忠治、野知里慶助、岡田恆治、和田字衛、仲俣吾市、平田稻雄、小藤作四郎、米山修、倉科浦一郎、一ノ瀬製裘壽、森巖、小林桂一郎、古根是、宇佐美周紫、原難助、甲田林原喜四三、黒岩正平、河島憲一、小池金三郎、岡田彌兵衛、藤井伍作、三原昇、青戸爲九郎、由尾忠助、赤岩藤太郎、嶽野利雄、坪倉藤三郎、宮崎惠喜太、廣瀬静之進、遠藤治一郎、藤卷壽一、横山治人、原七郎、廣野金作、篠原昇士、中島要人、中澤揚、宮澤清輔、山下常記

卒業生諸君に謹告す

卒業生諸君にして轉職其他に就き住所御移動の節は直ちに校友會宛御一報煩度林友發送の都合も有之候間右御含みの上左様被致度御依頼申上候

會費領收報告

- 金壹圓宛
 宮下 作次君
 上田 鉦二君
 肥田幸一郎君
 加藤 正治君
 丸山金三郎君
 三十六錢宛